

淨土

1992-8

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可 每月一回 日發行
昭和二十四年四月二十八日 (運輸省 特別授承認雜誌) 第三二五号
平成四年七月二十五日印刷 平成四年八月一日發行

第五十八卷

八月号





八月の秀句

白扇や水の如くはた雲の如く

小杉余子

団扇動かす膝立てしながらがらへ

西東三鬼

扇風機の風強くして法事終ふ

大吉敬子

八月号



決定往生の信心かたまりて、本願に乗じて順次の往生をとぐるなり。

——『つねに仰せられける御詞』

目次

＝連載＝

生も死も悦べる世界(八)……………須藤隆仙……(2)

〈法話 ①〉

お盆によせて……………成田光俊……(9)
——心の転換——

にここ法話

ミーちゃんの野球教室……………長谷川岱潤……(16)

季語やぶにらみ (26)

壬申の乱(3)

……………木下隆一……(22)

連
載

生も死も悦べる世界(八)



須^す
藤^{どう}
隆^{りゆう}
仙^{せん}

(函館市称名寺住職)

悦びの中の悦び

仮死状態になって再び息を吹き返した人たち、つまり臨死体験をした人たちが語るところによると、共通したものが四点ばかりあるようであります。

まず第一点は、魂が自分の体から抜けたという体験であります。例えば病人の場合ですと、病床の回りに親族がいて泣いている、臨終を宣告した医者もいるといった具合で、床

の上にはちゃんと自分の骸なみかがあるのですが、今一人の自分が、ずっと上の方から、天井の方からこれを見ているというのであります。この経験はかなり多くの人が語っているようであります、研究者はこれを「体外離脱」と呼んでおります。以前は「幽体遊離」といったようです。

次に体験するのは、暗い所をズーッと通って行くと、水があるということです。川であったり、池であったり、とにかく水がある。

その水の世界を過ぎると、こんどはきれいな花がいっぱい咲いている世界に出るといいます。

そのきれいな花の世界を過ぎると、こんどは彼方から、大変にきれいな光が煌々くわうくわうと輝いてくる、つまり光の世界に至るわけであります。

臨死体験をした人たちは、このところで生き返ってくるのだそうです。その花の世界と光の世界との境い目から、先立った兄弟とか知人とかが出てきて、「あんたはまだここへ来るのは早いですよ。さあ帰きなさい」とそういう。そこでハッと目が覚めたというのであります。

このような体験を、臨死経験の人たちが皆一様にといってよいほど、異口同音にいつておられるのであります。それぞれの具体的な面では違いはありますが、例えば水といって

も、それが川であつたり、沼であつたり、あるいはジメジメした所であつたり、花といつても、花園のように一面に咲いている所もあれば、また、小山のような所に、ポツポツと咲いている所もある、といったような状態ですが、とにかく、大体において、この体外離脱の体験、そして、水の世界、花の世界、光の世界、この四つを見てきているようであります。

私はこの話を聞いて、非常に尊く有難く感じました。それというのは、お経様に説く極楽浄土の世界というのは、まさにこの世界だからであります。みなさん、『阿弥陀経』を拝読してごらん下さい。みなそういうことが説かれているではありませんか。八つの功德の水をたたえたきれいな池があつて、そこに美しい蓮華が咲いている。「車輪の如し」といわれるほどの大蓮華で、それがまた青・黄・赤・白各々の色をもつ蓮華で、青色青光、黄色黄光、赤色赤光、白色白光といつて、それぞれの色からそれぞれの光を出している。かのアララギ派の大歌人斎藤茂吉先生は、『阿弥陀経』のこのくだりが大好きで、初めての歌集を出されますとき、ここから採って『赤光』という題を付けられたと聞いております。そのようなわけで、お浄土もまた水の世界・花の世界であられるのです。

さらにまたそこが光の世界でもあるわけであります。「かの仏の光明無量にして、十方の国を照らして障礙するところなし。是のゆえに号して阿弥陀とす」というのでありま

して、この光明無量の阿弥陀如来様が主人であられる極楽浄土でありますから、それはそのまま光の世界であるわけです。

つまりお経様にお浄土を、水の世界・花の世界・光の世界と説いておられる、その世界を臨死体験の人たちは見てきているわけであります。

これは一体、どういうことかと言いますと、この水・花・光の体験は、私は、人間が最後に大宇宙に溶け帰っていく、そのときの最終意識だと思っているのです。人間は宇宙から生じ、また宇宙の中へと溶解していくわけでありまして、その生じてから溶解するまでの間が人生（人間生活）というものであり、これを仏教では五蘊（ごうん）仮和合（かわくわく）とか何とかいっているわけですが、要するに人間の命というものは、大海の上に浮んで泡（あわ）のようなものでありまして、大海から生じた泡は一定の時を経過すると消えてまた大海水にもどってしまう如くに、宇宙から生じてきて、一定時間を経過するとまた宇宙へもどっていくわけがあります。このところを仏教では、無我だとか空だとか、さまざまに説明しているわけですが、現世にいる我々は実は宇宙が一つの妙体を生んだその妙体なのであります、本質的には宇宙そのものであります。だが現象的には、須藤なら須藤という一個の体なのであります、それはちょうど、海水が生んだ泡が、実は海水そのものであります。泡として浮んでいるうちは、一個の特質現象であるのと同じことでもあります。

経論を拝読してみますと、表現は違いますが、みなそのことを手を変え、品を変えてお説きになっておられるのでありまして、私は、結論はここにあるのだな（今述べたようなこと）と拝受して、どのような経典でも、どのような論書でも有難く有難く拝読しているわけがあります。

鴨長明があの名文『方丈記』の序に、「ゆく河の流れ絶えずして、しかも、もとの水にあらず。淀みに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまる例なし。世中にある人と栖すみと、またかくの如し」と記された、あのうたかた（泡沫）というものを人と栖に例えておられるわけです。それはまた人の生命そのものをいつておられるのでありまして、水と泡の関係、ここに仏教の生命観・靈魂観の重大な鍵があるのであります。

そのようなわけで、人間は亡くなりますと宇宙へもどるのです。大自然といったほうがよいかもしれません。『広辞苑』には自然も宇宙も同じ表現であるとチャンと出ておりますから、大自然といい直しておきましょう。人間が死ぬということは、その大自然へ帰るわけであります。

しからば、お経様に説く西方極楽浄土とは一体どこか。それが私たちの帰るべき故郷であるということは前回で述べましたが、自然・宇宙が即ちそれだったのであります。浄土教では、私たちが帰っていく自然・宇宙を、単なる自然・宇宙とは見ずに、仏教のお浄土

と信受していくのであります。そのように認識していくのであります。それが信仰というもの、信仰とはつまり認識の世界なのであります。何も認識しない世界、それはただのふつうの世界であります、認識されてくると信仰の世界、宗教の世界となってくる。でありますから、西欧のある学者は、宗教とは「無限への認識である」と定義されているのであります。

帰るべき自然、帰るべき宇宙を、極楽浄土と認識していく、そこに浄土の信仰が確立するのであります。

こういうことを申しますと、何か勝手なこと、いい加減なことをいうなどお思いの方があられるかもしれませんが、私は決していい加減なことを申し上げているのではないのであります。

そこで、いろいろと理屈をこねるよりも、まずこのことについて、法然上人の信仰上のお師匠様に当たられる中国唐代の善導大師のご教示を、左に掲げさせていただきます。

「仏に従つて逍遙しょうぎょうして自然に帰る。自然は即ち是れ弥陀ごの国なり」(『法事讃ほふじさん』)

何という尊いお言葉でありましょうか。今から千三百年以上も前に、善導大師はこんな

尊い有難いご教示を遺されておられるのであります。

ここにハッキリ、お浄土というものが、実は自然である、宇宙であるということが分かるのであります。そしてそれはお浄土、極楽浄土と認識することによって始めて出てくる世界なのであります。認識しませんと浄土ということが分らない。分らないとそのため悦びも、意義深さも感じられませんか、前々回にもいったように心のルンペンになってしまうわけであります。

インドでお浄土に関する論文をお書きになられた世親菩薩は、その極楽浄土というのは「三界の道に勝過」した世界であるのご説明されたのであります（『往生論』）。どういふことかといいますと、極楽浄土は欲界・色界・無色界の三つの世界（これを三界という）をさらに超えた世界だということです。欲界というのは欲望の世界、色界は物質的な世界、無色界は精神的な世界、これらをみな超えているというのですから、それはすでにもう宇宙そのもの、大自然そのものであります。「広大にして辺際なし」とも記しております。正に大宇宙であります。

（つづく）

法
話
(1)

お盆によせて

—心の転換—



都会の混雑がうそのように静かになり、反動で、高速道路に車が殺到し、また駅には人の波が続いています。年に何度かある光景で

成^{なり}田^た光^{こう}俊^{しゅん}

(横須賀市専福寺住職)

すが、その一つがお盆の時に訪れてきます。
故郷は遠くにありて想うもの……といわれるように、故郷を遠く離れると、過ぎ去った日が懐かしく想い出されるのだらう。これは

故郷を持った者にしか分らない望郷の念だと思ひます。その故郷では、今かいまかとご先祖たちが静かに遠くから訪れてくる肉親を待ちわびていることだと思ひます。墓前に佇んで、遠く離れた生活・家族のことなどを熱心に語りかけている光景。また「親の背を流す」がごとく「墓洗う」の句そのままに、丁寧に水を掛けてゐる姿は微笑ましく、美しいものだけれども、その方々の心にはなにか去来しているのでしょうか。

現代の社会は都市集中型になり、両親の深い縁によつて生れさせていただいたにもかかわらず、社会事情とはいへ、故郷に年老いた親だけを残して生活している人達もいます。その中にはわが子の訪れを待ち続けつつもひ

とり淋しくこの世を去つて往つた方々もいられることでしょう。

人間は年老いてくると、生活環境の変化を好まずに、住み馴れた場所で生活することを望んでいます。しかし、「年老いた親だけを住ませとくわけにはいかないよ」という若い方々の意見で、好むと好まざるにかかわりなく、自分の意志とは異なつて都会での生活をしている方々もいられます。その方々の顔には、なにか淋しさが漂よつてゐるように思えてなりません。

先日、訪れて来られた老婦人も、三人の子どもたちが都会での生活をされ、数年前に故

郷で共に生活していた夫と死別して、以来、独りで生活していたのですが「おばあちゃんひとりでの生活ではあぶないから……」と再三にわたって長男夫婦に言われても「大丈夫だよ。まだ私は元氣だからね」と断り続けていたのですが、熱心に説得するお嫁さんの求めで、一年ほど前に長男夫婦と同居することにしたのです。

長年住み馴れた土地と別れ、新しい環境の中で、隣り近所の今まで一度も会ったことのない方々との人間関係をつくるには、年老的、都会生活をしたことのない婦人には大変なことでしたが、やっと親しい友達も出来、少しこころが安まった頃に、思いがけないことが起ったのです。

長い間の習慣になっていた亡き夫の仏壇にお茶を供え、お線香をあげていた時「おばあちゃん、お線香の煙は部屋を汚すので困るのよ」。声は優しいが、心にはドスンと響く言葉でした。故郷では誰れにも遠慮することもなく、朝起きると仏壇に好きなお線香を供えて、亡き夫に出来事を語りかけることを日課にしていたのに……「息子さんも、やっと造った家でネ。子どもたちも嫌うんだよ。おばあちゃん、いまは煙の出ない線香があるんだって言うよ」と歯切れが悪い。

切ない思いで老婦人は煙の出ない線香を買い求め、夫の仏壇に供えたが味けないものだった、としみじみと語っていた。香の紫雲とともにほとけ来迎し給う、というお論しも

時代に流されてしまうようで、淋しいかぎりです。それにしても、喘息に悪いなどのさまざまな理由で、最近はこの煙りの出ない線香が多くなつたように思います。

浄土教の信者が実践することを示された五種正行の中に説かれている讃嘆供養は、心のこもった香華を供えることも教えています。お供えする線香が煙の出ないものであつても、たしかに心のこもっていることの方が大切なことは分りますが、家庭の事情や家族の都合で供えることが出来ないのは、香の良い、美しい紫雲のたちこめるものを切なる願いとしている方には、悲しく、辛いことだと思えます。

嫁と姑との関係は、古今東西の問題で、解

決のない、永遠の課題かと思えます。たしかに、生れも育ち環境も異なる者が、新しい人間関係を築くのが大変なことは当然です。まして自我が確立している人間だけに、プライドの尊重とプライバシーの確保を強く望んでいるものです。その反面で、お互い心の中ではなんとか助けてくれることをこいねがい、求めているのではないかと思えます。

お盆に、親の墓石を背中を流す思いで洗いをかけることも、墓石の前で、家族の方々のことを語り続けることも大切ですが、いとお互いの立場を考え、理解し得るように努力しながら生活することの方が必要だと思いま

す。

お盆は、いま生れさせていただいたことを喜び、その縁を与えてくれた親に感謝をすることです。誰れが作られたか分りませんが、父母恩重經に因んだ報恩の歌に、

父 死に給う そのきわに

泣いて 念ずる 声あらば

生きませるとき 慰めの

言葉交して ほほえめよ

母 息絶ゆる その臨終に

泣きて 合掌む手のあらば

生きませるとき 肩にあて

まごころこめて 揉みまつれ

とあります。この歌は、生きている時お互いが、共に生き、協調、協和をするのにどうしたらよいかを充分に考えなさい、と、示唆されているように思います。

今はそう思っている人はいないよ、と言われるかも知れませんが、老人福祉が社会の声になった時から「お年寄りには、なにかを与えられても良い」という考えが生れたように思います。よく耳にする「私も食費を出しているよ」という言葉の響には「出さなくても良いのに」という思いが感じられます。食費を出すのが当然か否かは個々の考えがあるのでしようが、現代社会で年金もある程度確立されているだけに、お互いの立場を考えること

が必要です。家族にはそれぞれの役割があり、それをお互いがしっかりと守ることが大切です。

生れさせていただいた私たちが、如何に生かさせていただくかが、自ずからの役割で、その確立が人間としての自立なのです。親が独りで生活することが出来るならば、またそれを望むならば、見守りながらそうさせることが親孝行で、お互いの自立になるのです。なんでも手を出さなければならぬ、と思ったり、出来るか否か分らないままする虚勢の行動が誤りなのです。このような中味の少ない、見栄や型ばかりのテンブラ生活が、お互いの自立を阻害しているのです。

老婦人も、自分での生活が出来る間もう少しお互いの理解の中で生活していれば、亡き夫に自分の思うがままの線香を供えることが出来、心の満足を得たでしょう。息子さんご夫婦にしても、心の痛みを受けることがなかったでしょうに……

現代は貧困の時代……こんなに豊かになったのに、とお笑いかも知れません。貧困と言うと生活が貧しく、苦しいことを指すかも知れませんが、それだけではないのです。いまの社会は、言語の貧困、表現の貧困など日常生活を営むことがらについての貧困が多いように思います。これがお互い自立する壁になっているのです。

現代社会で起きている老人問題や青少年問題の中で、家庭にその要因の主があると考えられるものを見ると、自立や相手の立場を、お互いが思いやってないことが多いようです。その原因の一つに、言語、表現の貧困からお互いが誤解しているように思えてならないのです。一つのボタンの掛け違いが、次々に相手の心を踏みつぶしているようです。相手の自立や立場を思いやることは、相手の存在を認めることです。

家庭での話し合いも「相手が変ればいいのだ、私は変らない」という他者変容支配型の傾向が強いように思います。老婦人のお線香にしても「私たちの家だ、あとから来たおばあちゃんを変えるのが当り前だ」との思いが

強かったのではないでしょうか。良し悪しを別にして「私自身を変えて見る」という心の転換をする方法もあるのです。老人問題や青少年の問題で、解決を遅らせている原因に「相手が変わるのが当然」という考えがあることも知ってほしいものです。

お盆に、ご先祖に思いを寄せ、感謝をすることも大切です。報恩の歌のように、亡きあとで涙することもあるでしょう。だが、私たちが常々に称える「願共諸衆生 往生安楽国」のお経に示されるように、現代社会を「共に生き、生かさしていただくために」このお盆に、私たち自身の心を変えて見ることを誓い合うことが、より必要なことだと思います。

ミーちゃんの野球教室



長谷川 岱潤
はせがわ たいじゆん
(東京・品川区戒法寺住職)

「お父さん、このなぜなぜわかる?」

「どんなんだ」

「あのね、魚さんチームとくだものさんチームが野球をしました。マグロくんとみかんくんの好投で○対○のまま緊迫した投手戦。いよいよ回も押しつまって九

回の裏、ツアアウトランナーナシ。ここでブドウくんが大ホームラン。さてこの試合、何対何だったでしょう」

「そんなの簡単じゃない、一対○でくだものさんチームの勝ちでしょう」

「ブー。残念でした。二対○です」

「どうして」

「九回裏の攻撃は、ツアアウトでランナーがナシくんだったのです」

「ああ、ナシくんね。これはやられた。」

それにしても、ミーちゃんは野球が好きだねえ。今月は昼間は高校野球、夜はプロ野球があつて、だいぶ興奮してたよね」

「でもね、私本当は見てるよりもやるほうが好きなの、中学に入ったら、野球部に入りたいな」

「女の子は入れても、野球やらしてくれるのかなあ」

「ええ、どうして」

「野球部というよね、普通は硬式か軟式という、どちらにしても固いボールを使うんだよね、だからとても危険なスポー

ツなんだよ、だから女の子はきっとソフトボールというのがあると思うよ」

「あのボールの大きな方でしよう、ちよつとがっかりだなあ」

「最近はお父さんでも硬式や軟式の野球もはやっているそうだから、わからないけどね。そうだ、そんなに野球が好きなら、今度はお父さんが問題を出すぞ」

「いいわよ」

「先頭バッターが、センター前にヒットを打ちました。センターの人は、そのボールをどこにかえすのが正しいですか」

「そうねえ、やはり一塁かなあ」

「ブー。それはね、セカンドかショート、のどちらかの人が二塁のベースに入って、その二塁に返すのが正しいんだよ」

「どうして、だって、たまにライトゴロ何て言つてランナーがアウトになることだってあるんだから、ランナーの走ってくるベースに投げるんじゃないの」

「ライトゴロなんてよほどあたりが強烈で、なおかつバッターの足が遅い時に成り立つ、かなり珍しいことで、ましてやセンター前ヒットでは絶対考えられないよね。だったら打たれたことは、もうしょうがないとあきらめて、ただし次のベースには進ませないぞということで、一番近くの内野手の人にボールを返すことが鉄則なんだよ」

「一塁には投げない？」

「無理して投げて、もしエラーしたら大変だからね、原則では投げないよ」

「あきらめるってことも大事なことなのね」

「そうさ、あきらめるっていう言葉は、漢字では諦めるって書くでしょう。この諦めるっていう字は、仏教では真理、おさとりを意味しているんだよ。『四諦八正道』なんていう言葉は、仏教を勉強すると一番最初に出てくる言葉なんだぞ」

「仏様のこともあきらめが大事っていうこと」

「ガク、ちょっとニュアンスが違うんだなあ。普段使ってる、だめだと思つてはうり投げてしまう意味のあきらめではなくて、その言葉のほとんどの意味の、あきらかに見る、という意味で諦めるということが大事だということさ」

「明らかに見るってことなのか」

「お釈伽様のお説法の中に、第二の矢を受けないっていうお話があるんだ。それはね、仏様の教えを聞いてる人と、そうでない人の違いをいつているところだね、仏様の教えを聞いていない人は、第一の矢に刺され、さらに第二の矢にも刺されてしまうようなものだよって聞いてるんだよ」

「ええ、どういうこと」

「つまりねお釈伽様は、私たちが人間である以上誰だって、美しいものを見れば美しいと感じるし、醜いものを見たら醜いと感じる。憎いものには憎いと感じ、嫌なものは嫌だと思う。そのこと自体には仏様の教えを聞いている聖者も、聞いて

ていない者も少しも変わらないと言っているんだ。しかしその次が違うんだと。

仏様の教えを守れる聖者は、そのことを心にとどめないから、いつも清らかな気持ちでいられるし、そうでない者は、いつまでもそのことを心にとどめ、執着し、欲しいと思う欲望や、憎いと思ういららの心が次の行動をおこさせてしまう。これはちょうど第二の矢にも当たるようなものだよって聞いてるんだね」

「センターから一塁に投げたりするのは、第二の矢なんだね」

「そう、そういうところで、本当に野球を知っているか知らないかがでちゃうのさ」

「でもさ、相手ののろのろ走っていたり、

そうだ、転んでいたりなんかしてたら一塁に投げるよねえ」

「そりゃあそうだよ、アウトにできる可能性さえあればどんな投げなくちゃあ。だからあきらめるのは、明らかに見ることなのさ。第二の矢を受けないというのはね、打たれた後のピッチャーの気持ちなんかを考えるといいのさ。いつまでも打たれた球を気にして、カーブを投げたらまた打たれちゃうのではないかとか、またピッチャー返しにされたらどうしようとか考えて、びくびく投げるのと、今度こそ抑えてやれと投げるのでは、同じカーブでも全然曲がり方が違ってしまふと思うのさ。だからそういうことを第二の矢を受けないと言うんだよ」

「ねえ、ランナーが出るとき、よくバントつてするじゃない。あれさバントするほうのバッターはつまんないよね」

「そんなことないさ。野球じゃチームプレーが一番大事なんだよ。それにお父さんはバントつていうのは、なんか仏様の教えを感じるなあ」

「ええ、どこが？」

「プロ野球の西武にいる平野選手とか、巨人の川相選手つて知ってるでしょう」

「もちろん知ってるよ」

「この選手たちはバントで名を揚げた選手だよ。つまりね、バントはチームのために、自分が犠牲になっているような形であるけれども、それ自体で十分自分のためになっているってこと。情けは人の

ためならずどころではない、情けが回る必要もなく、そのまま即自分のためになる、自分が犠牲になっているのに、それ自体が自分のためになる、これはまさに『布施の心』を絵に描いたようなものさ」
「なるほどねえ、お父さんって何でも仏様の教えとくつつけちゃうのね」

「野球はねえ、ピッチャーとバッターの対一の勝負みたいに見えてしまうけれど、決してそうではないんだよ。九人対九人の総出のぶつかり合いなんだよ」

「どうして、打つのは一人だよ」

「今度よくプロの試合を見ていてご覧、センターにヒットを打つと、そのセンターの後ろに必ずライトかレフトが回り込んでいるよ。外野に大きなあたりだった

ら、ショートかセカンドが必ず外野と内野の中間まで行つて中継しているし、バックホームされた時はピッチャーがキャッチャーの後ろに回り込んでカバーしているでしょう。野球は一つのボールをめぐるって、先の先まで考えて動いているんだよ。打つほうだって、前のバッターがピッチャーのその日の調子を見たりしながら、九人が協力して点を取りに行く、それがおもしろいんだよね」

「でもさ、そういう九人の動きってさ、テレビじゃわからないよ。今度野球場に連れてってよ」

「それもそうだね、よし、今度みんなでナイターを見に行こうね」

「やったー」

壬申の乱(3)

鎌足亡き後の推移を見ると、事ある毎に額田王は鎌足の予見が正しかったことに、かな戦慄を覚えるのであった。天智天皇は以前のように神託などに頼ることなく、独断で強引に政治を推し進めていた。それにしても、性急すぎると額田は思ったが、天皇には天皇

で、そうせざるを得ない肉体的な悩みがあったのである。

六六八年即位した頃から、天皇は腹部に異常を感じるようになっていた。異常は腹部の真ん中辺りに出来た小さな瘡りであった。初めは時たまチクリチクリと痛む程度だった

木の
下
隆
一

(随筆家)

が、やがてその痛みが長引くようになり、時には刺すような痛みとなって全身を貫いた。その度に腹部の痼りは大きさを増しているように天皇には思えた。そんな天皇にとって、鎌足の死は衝撃であつた。食欲は極度に減退し、痛みを忘れるために酒に逃避したのは致し方ないにしても、誰の目にも病状が進んでいるのが明らかになると、人目を厭い、だんだん朝議にも出席しなくなった。重要案件も朝議にかけられることなく命令の形で降りてきて、直ちに実行されることが多くなつた。鎌足が言つた「いつの頃からか、天皇はご自身が神であると信じこまれてしまわれた」というのはこのことであつたかと、額田は納得した。

六七一年初頭に発表された朝廷の人事で

は、大友皇子が太政大臣に、左大臣には蘇我赤兄、右大臣には中臣金連が選ばれ、蘇我果安臣、巨勢人臣、紀大人臣の三人は御史大夫に任ぜられたが、客観的に見て東宮的位置にあつた大海人皇子の名はどこにもなかつた。これは政治の主流から外されたことを意味しているのは勿論だが、つきつめて言えば、すべての権限を剝奪されたのに等しかった。

この発令があつた時、額田は改めて鎌足の洞察力に驚嘆したのであるが、これは必ずしも天皇のご意志ではあるまいと思つた。なぜなら、鎌足の死によつて甦つた反鎌足派の赤兄等が、どちらかというと鎌足寄りの考えを持っていた大海人を敬遠するのは当然だったし、彼等には大友皇子を担いで政治をほしいままにしようという野心があつて、着々とそ

の準備をしていたが、最大の障壁である大海人を除くには、今回の人事異動は千載一遇の好機だったからである。だが、一攫にこれを廃することはしなかった。いや、出来なかったのである。軍を掌握していた大海人の無力化を図るためにまず権限を取り上げ、しかる後に彼の息のかかった豪族や武将の多くを、何かと理由をつけては地方へ追いやった。これに反発して大海人が動いてくれれば、それを契機に大義名分をつけて屠ればよいと考えていたのである。

しかし、大海人は動かなかった。赤兄等の出方は読めていたし、第一、大友皇子と皇位を争う気持ちなど、全く持ち合わせていなかったからである。これは赤兄等にとっては大きな誤算であった。

この年の春から秋にかけて、大海人は朝議にも顔を出さず、新しく邸内に設けた持仏堂に籠って、ひたすら兄天皇の平癒を祈願して、念仏三昧の日々を送っていた。

「額田が貴公の言葉を伝えに来たのは、去年の秋の今時分であった。それで俺は吉野への隠遁を決意した」

大海人は瞼の裏の鎌足に語りかけた。

「あの時の額田の言葉を、俺は終生忘れないだろう。まず貴公の示唆を伝えてから、『これから申し上げるのは、昨夜私が得ました神託でございます。よろしゅうございますか、神はこう申されました。帝の許しを得て得度し、直ちに吉野へ隠棲せよ。決して大勢で行ってはならぬ。妃も鸕野皇女のみ同行すること。』

もし討手がかかっても闘つてはならぬ。鎌足の言に従い、美濃へ脱出せよ。さすれば道は自ずと開けるであろう。そして、こうも言った。『鎌足様の遺言通りになさいませ。でなければ、額田も皇子様のお命は保証致しかねます。吉野から美濃への道案内は額田の里の者に致させます。子飼いの中に心利きたる者がおりまするゆえ』。神託と言っていたが、あれは恐らく俺に対する額田の思い遣りだったんだな。顧みれば、俺は今まで何度も有利な神託を降してもらつて彼女には助けられた思いがする」

「額田様の神託のからくりによつとお気付きになりましたか」

「気付かないでどうする」

「すべては額田様のお優しい心根から発した

ものでございますよ」

「だから俺は聞いてやった。初めて俺に抱かれた時も、そなたは神託に頼つたのかと」

「お答えはございましたか」

「なかつた。ただ短く笑つただけだった。額田には先帝の御陵が出来次第、鎮魂の歌を奉つてもらおうと思つている。それで彼女の巫女としての役目を全うさせてやりたいのだ」

「それがようございます。先帝もいかばかりお喜びになられることか……」

暁を告げる鶏鳴に、大海人皇子はふと我に返つた。と同時に臉の裏の鎌足も姿を消した。いつか、机にうつ伏してまどろんでいたのがある。窓から流れ込む霧に、短檠の火が大きく一揺らぎすると、ジジと音を立てて消えた。

目覚めはいつになく爽やかであった。

「文武百官、全員揃っておりまする」

宿直の声に、大海人は勢いよく立ち上がった。

「直ぐに参る」

広場には、左に武官右に文官が居並び、それぞれ胸に不安と僥幸を恃む手前勝手な臆測を秘めて、言葉少なに佇んでいた。大海人は壇上に立つと、低いがよく通る声で言った。

「全軍に告ぐ。此処に参集した諸官は、予の言を一言半句たりとも違ふることなく、それぞれの部署に立ち戻つて部下に伝えよ。此度の戦は、少数の不心得者が起こした誠に不幸な出来事であった。予も大友皇子も、少しも争う気などなかったのである。しかし、戦は起こってしまった。神が予に与え給うた試練

と受けとめているが、それによって多くの死傷者を出してしまったことは、当事者の一人として慚愧に耐えぬ。許せ！」

大海人はここで一旦言葉を切つて、居並ぶ百官の反応を見守つた。重苦しい沈黙が支配する広場を、湖面から湧き出た濃い霧の塊が、幾つも幾つも速い速度で通り過ぎて行つた。

「許せ！と言われても……」百官の面に浮かぶ困惑の表情を読みとると、大海人は後ろに控えている文官の一人に顎をしゃくつて、前へ出るようながした。進み出た文官は、携えて来た木簡にうやうやしく一札すると、

「では、大海人皇子様より降された処分を発表する。皆の者、謹んでお受けせよ」と重々しく宣告した。

「斬、前右大臣中臣金連。斬、……」

今回の争乱で、近江方の主導的役割を果たした者の名が、ゆつくりと次々に八名読みあげられた。

「流、前左大臣蘇我赤兄。同じく流、前大納言巨勢人臣。遠流の地については追って沙汰する。なお、その他の者は一切不問に付す。その他の者は一切不問に付す。以上である」

と、文官が一際声を張り上げて結ぶと、広場からは一斉にどよめきが起こった。処分をまぬかれた喜びの声もあったが、大方は処分者が少ないことに対する驚きの声であった。

どよめきが収まるのを待って、大海人は立ち上がった。

「楽にして聞いてくれ」

大海人はいつものようにくだけた調子で言った。

「処分が軽過ぎると思う者もいるであろうが、元々我等は一つ、吉野も近江もないのだ。今後は一切のわだかまりを捨て、国力の回復に努めてもらいたい。その手始めに、予は高安城の修復の全面中止を約束する。これに予定していた費用と労力は、大和の国の復興に当てたいと予は考えている。何しろ大和は国のまほろばだからな。それを蔑ろにして此の地に都したのは、前の天皇が犯した唯一の過ちであった。予は速やかに飛鳥に戻り、良き地を卜して宮居を定めたいと思う」

提言の形をとってはいるものの、これは遷都の宣言であり、事実上の天皇即位の宣言でもあった。

皇極女帝はその在位中に土木建築に関心を示し、それが国民の怨嗟の的になったと伝え

る史書もあるが、これを推進したのは、実は蘇我入鹿であった。皇位を篡奪した後のことを慮ってか、飛鳥の都を守るために、唐の万里の長城を模した城壁を造ろうとしたのである。先頃、その一部が発掘され、日本書紀の記述は正しかったと報道されて話題になったが、高安城はその延長線上にでもあった城であろうか。城の構築や手直しは、朝鮮半島の情勢が緊迫するたびに進められたり、一時的に平穩化すると中止されたりしていた。今となつては城の規模は知る由もないが、そのために取り立てられる特別税は厳しいものであつたに違いない。だから、高安城の修復中止の報は国民にとっては朗報だったが、遷都に要する莫大な費用は、この巧妙な擦り替えによつて捻出されたのである。これが政治と

いうものであらう。

遷都を宣告し、即位を暗示すれば、大海人にはもう言うべきことは何も残っていなかった。あとは一日も早く軍を収めて、飛鳥へ帰る行動を起こすだけであつた。

霧が薄れて行くと、遠い山並の上に朝日が昇つた。後にいう「壬申の乱」は、この日を以て終熄したのである。

乱世の卦に壬申の年明けぬ、という駄句に端を発した拙文、つい「壬申の年」にのめり込んでしまった。書いているうちにますます本題から乖離して行くので、軌道修正のためひとまず筆を擱き、次号からは本来の「季語やぶにらみ」に立ち返りたいと思つてゐる。

(この項了)

舞見御中署

浄土宗事務総長 成田有恒 〒154 世田谷区世田谷四―七―九 大吉寺	埼玉工業大学 松川文豪	鎮西学園理事長 鎮西高等学校校長 真和中・高等学校校長 上田祐規 〒802 熊本市九品寺三―一―一 電話(〇九六)三六四―八一七六	東山学園 学園長 石井俊恭 常任理事 山崎宏賢 西出澄弘
上宮学園 理事長 小林昭五 学園長 小西祐謙 上宮高等学校長 〒543 大阪市天王寺区上之宮町三一―六	上宮太子高等学校長 安井良道 上宮中学校長 〒583 大阪府南河内郡太子町太子	法然上人御降誕地二十五霊場第一番 中国三十三観音特別霊場 誕生寺 〒709 岡山県久米郡久米南町里方八〇八 電話(〇八六七)二八―二〇二	淑徳高校名譽校長 保元寺住職 里見達人 〒111 東京都台東区橋場一―四―七
教安寺住職 野呂幸進 〒210 川崎市川崎区小川町六―一	大田秀三 〒370 高崎市通町九〇 安国寺 慈光ビル(〇二七三)三―四〇〇〇	浄土宗華陽院 社会福祉法人玉桂会 堀田良謙	堀田卓爾 堀田良爾 〒420 静岡県鷹匠二―二四―一八

舞見御中

龍泉寺住職 伊東 康雄 〒107 東京都港区南青山二一八―二五	大本山光明寺執事長 西念寺住職 北邨 謙順 〒250-01 南足柄市沼田三一五 電話 ○四六五(七四)〇五八八	回向院住職 本多 義敬 〒130 東京都墨田区両国二一八―一〇	雲上寺住職 東海林 良雲 〒985 塩釜市南町一一―一
おてらとみなさんの相談所 桜と観音さまのお寺 浄心寺 小池 政雄 〒113 文京区向丘二一七―四	須藤 隆仙	鎌倉大仏殿 高德院 住職 佐藤 密雄 〒248 鎌倉市長谷四―一二八 電話 (〇四六七)二二〇七〇三 FAX (〇四六七)二二五〇五一	旭蓮社大阿弥陀経寺 山田 智旭 〒590 堺市寺地町東四―一一四 電話 ○七二(三三)六一四〇
清岸 寺 住職 原口 徳正 副住職 原口 正弘 〒151 東京都渋谷区幡ヶ谷二一三六―一	松庵寺内無為窟主 小川 金英 〒025 花巻市双葉町六―四 仏教福祉センターによるひる銀行	正覚寺住職 楠美 知行 〒030 青森市本町一一―一二二	大善寺老住 裏辻 賢洲 〒811-32 福岡県宗像郡福岡町松原区 三九一四

舞見御中

法然上人二十五霊場 第二番仏生山法然寺 細井俊明 〒761 高松市仏生山町甲三二一五	伝通院住職 吉川哲雄 〒112 東京都文京区小石川三一四一六 電話〇三(三八一四)三七〇一(代表)	圓光寺住職 浄土宗宗議会議員 加藤順底 〒020 盛岡市南大通三一―一四九	北川一有 長寿院 〒11 東京都台東区鳥越二―一三一八
札幌新善光寺 太田隆賢 住職 太田眞琴 〒064 札幌市中央区南六条西二丁目	檀王法林寺 だん王子供の家 信ヶ原良文 〒606 京都市左京区川端通三条上ル 法林寺門前町三六	浄運寺住職 野口善雄 〒376 桐生市本町六―三九八	西住院 戸川靈俊 〒606 京都市左京区黒谷町三〇
近龍寺住職 松濤弘道 〒328 栃木市万町二二―四 電話(〇二八二)二二一〇八〇二	芳泉寺 柳楽真純 なぎら しんじゅん 社会福祉法人 大慈会・かんぎおん 〒386 上田市常磐城三一七―四八	光明寺 白幡憲佑 〒232 横浜市長区庚台六六(久保山)	〒440 豊橋市関屋町二二―一 宗教法人 悟真寺 代表役員 立松 辨成 電話(〇五三二)五二―五五六六

舞見御中

愚鈍院 中村眞道 〒980 仙台市若林区新寺三二二一七 電話(〇二二)二五六一六〇五七	晴雲寺 塚田弘導 〒254 平塚市立野町六一五	浄土宗二祖鎮西聖光上人遺跡 聖光寺 小林忍戒 〒600 京都市下京区寺町通仏光寺上ル 電話(〇七五)三五一七五八四	九品仏浄真寺 清水順碩 〒158 東京都田谷区奥沢七一四一一三
お骨仏の寺 一心寺 貫首 高口恭行 〒543 大阪市天王寺区逢阪二八一六九 電話(〇六七)七一〇四四四(代)	浄土宗宗議会議員 齊藤价洲 〒110 東京都台東区東上野五一一一六 宗源寺	大松寺 酒井亮貫 〒108 東京都港区三田四一一三八 電話(〇三三)三四五一二四九四	仏教書専門 山喜房仏書林 〒113 東京都文京区本郷五一二八一四
有限会社 小暮製本印刷所 〒162 東京都新宿区西五軒町三一十一 電話(〇三三)三六〇一六七二八 (〇三三)三六九一六八八八	大道社 〒102 東京都千代田区飯田橋 一一一六	法然上人鑽仰会	法然上人鑽仰会 同人一同

◎読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努めています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、くれぐれも宜しくご協力下さい。

- 一、内容 自由（生活の一コマや信仰的な感想あるいは思うことなどをエッセイ風におまとめ下さい。）
- 一、枚数 四百字詰用紙六〜十枚程度
- 一、締切 毎月末日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定	会費一カ年 金三、〇〇〇円 (送料不要)	浄土 五十八巻 八月号	昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可 平成四年七月二十五日 印刷 平成四年八月一日 発行 編集人 宮林昭彦 発行人 佐藤密雄 印刷所 (有)小暮製本印刷	東京都千代田区飯田橋一―十一―六 発行所 法然上人鑽仰会 電話〇三(三三六二)五九四四 〒103(振替)東京八―八二二八七
-----------------	---------------------------------	------------------------	---	--

舞見御中署

総本山 知恩院 門主 藤井実應	大本山 増上寺 法主 中村康隆	大本山 金戒光明寺 法主 稲岡覚順	大本山 百万遍知恩寺 法主 林 靈 法
大本山 清浄華院 法主 江藤澄賢	大本山 善導寺 法主 藤堂俊章	大本山 光明寺 法主 藤吉慈海	大本山 善光寺大本願 法主 一条智光
〒170 東京都豊島区西巣鴨三二〇—一 大正大学 電話(〇三)三九一八—七三二—一代表	〒603 京都市北区紫野北花ノ坊町九六 佛教大学 電話(〇七五)四九一—二二四—一代表 通信教育部 四九一—〇三三九	学校法人 大乘淑徳学園 理事長 長谷川 良 昭	京都文教短期大学 学長 大河内 良 孝 〒611 宇治市横島町千足八〇